

## 第 103 回膠原病研究会

日 時 平成 28 年 11 月 1 日 (火)  
午後 6 時 30 分～  
会 場 新潟大学医学部 有壬記念館

## I. 一 般 演 題

## 1 妊娠を契機にループス腸炎で発症した全身性エリテマトーデスの 1 例

鴨田 知明・中枝 武司・若松 彩子  
野澤由貴子・佐藤 弘恵\*・和田 庸子  
黒田 毅\*・中野 正明\*\*・成田 一衛  
新潟大学大学院医歯学総合研究科  
腎・膠原病内科学分野  
新潟大学保健管理センター\*  
新潟大学医学部保健学科\*\*

症例は 36 歳，女性。

【主訴】悪心，腹痛。

【妊娠歴】2 妊 1 産。

【現病歴】X 年 2 月，A 病院で妊娠 16 週に流産し，子宮内容除去術を施行された。悪心，腹痛が続き，脱水症もあり，B 病院に入院した。造影 CT で大量の腹水と広範囲の腸管浮腫が認められ，抗核抗体 1280 倍であり，当科に紹介され入院した。頬部紅斑，関節痛，腎障害，低補体血症，抗核抗体陽性，抗 DNA 抗体陽性，腹部 CT で target sign を伴う腸管浮腫が認められ，全身性エリテマトーデス，ループス腸炎と診断した。ステロイドパルス療法，プレドニゾロン 60 mg 内服，シクロホスファミド間欠静注療法で，軽快した。

【結語】妊娠の終了を契機にループス腸炎で全身性エリテマトーデスを発症することがあり，注意が必要である。

【利益相反】なし。

## 2 血清反応陰性関節リウマチと診断した症例の臨床的特徴と治療状況

近藤 直樹・藤沢 純一・遠藤 直人

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
機能再建医学講座整形外科学分野

【目的】リウマトイド因子陰性の関節リウマチの臨床的特徴と治療状況を調査すること。

【対象と方法】2014 年 7 月から 2015 年 6 月まで当科関節リウマチ (RA) 外来を初診し演者 (リウマチ専門医) が RA と診断した症例のうちリウマトイド因子がカットオフ値 (15IU/l) 未満の症例を血清反応陰性関節リウマチ (Seronegative RA; SNRA) と定義したところ 23 例が対象となった。その臨床的特徴と治療状況を調査した。同時期にリウマトイド因子がカットオフ値以上の症例で RA と診断した症例 (Seronegative RA; SPRA) を対照群とした。年齢，高齢発症関節リウマチ (60 歳以上) の占める割合，初診までの罹病期間，罹患関節，抗 CCP 抗体の陽性率，値，血清 MMP-3 濃度，メトトレキサート (MTX) および生物学的製剤の導入状況を評価した。

【結果】年齢は SNRA 群で 65 歳 (40-81 歳)，女性比率は 73 %。SPRA 群では 66 歳 (24-83 歳)，76 % で差はなかった。紹介初診までの平均罹病期間は SNRA1.8 年，SPRA3.2 年と有意に SNRA で短かった。高齢者率は SNRA65 %，SPRA72 % と差がなかった。罹患関節は手関節，手指 MP，PIP 関節，膝関節の順で多く両群間に差は認めなかった。抗 CCP 抗体の陽性率は SNRA で低く (26 % 対 SPRA 88 %)，抗 CCP 抗体の値も SNRA で有意に低値であった (60.8IU/l 対 SPRA509IU/l,  $p < 0.05$ )。血清 MMP-3 濃度は SNRA 群 464ng/mL で有意に高かった (対 SPRA256ng/mL,  $p < 0.05$ )。MTX が 11 例 (48 %)，生物学的製剤が 8 例 (34 %) に導入されており，SPRA 群と同等であった。(SPRA 群；MTX10 例，40 %，生物学的製剤 7 例，28 %)。

【結論】SNRA 群は SPRA 群に比べ，抗 CCP 抗体の陽性率や値は低く，血清 MMP-3 濃度は高い特徴を有していた。薬物の導入状況は同等であった。